

# 平成18年度 国語部会研究主題

## 1 研究主題

### 主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもが育つ国語科授業の創造 「読むこと」を見据えた国語科学習指導の構想と展開

## 2 研究主題設定の理由とその考え方

### (1) これまでの研究から

変化の激しい社会を、子ども一人一人が、心豊かに、たくましく生きるためには、生きて働くことばの力とともに、自他のことばを尊重する心情や態度が大事である。特に、人間形成の中核をなす国語科においては、ことばをとおして豊かに他者や社会とかかわり合い、ことばへの興味・関心をもちながら、自己のことばをはぐくみ、自己の願いを実現していく子どもを育てることが求められている。

本県国語部会では、平成12年度から「生きる力が育つ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。子どもが主体であるという教育の原点を見据え、指導者は、一人一人の子どもの中に生きる力が「育つ」ことに意を注ぎ、「育つ」ように学びの場を設け、さまざまに指導・支援をしてきたのである。平成12年度以降の実践研究における主な成果を列挙すると、次のようになる。

- ・一人一人の子どものことばの力やことばの生活、ことばの学びの実態をとらえること（学習者理解のあり方）
- ・身に付けさせたいことばの力を系統化してとらえること（国語能力の明確化と国語能力表の作成）
- ・年間あるいは6年間のことばの力を見通して取り組むこと（国語能力を踏まえた年間指導計画の充実）
- ・子ども一人一人のことばの力やことばの生活を踏まえ、生き生きとしたことばの力が育つ授業を展開すること（国語科授業の充実）
- ・国語能力の評価規準の明確化、評価計画の具現化を図ること（評価のあり方）
- ・各単元・単位時間における目標設定・指導・評価の一体化を図ること（指導と評価の一体化）

これらの成果は、子どもに身に付けさせたいことばの力を系統化するなどして明らかにし、ことばの生活や学びを見つめた指導と、それらをとらえた評価とを結び付け、適切に目標を設定して、一人一人に生きる力が育つ国語科授業を創造することにより得られたものと考えられる。つまり、私たちは国語科における「生きる力」の育成を求めて、学習指導の展開を工夫してきたのである。

### (2) なぜ「主体的・自覚的」か

本年度も、これまでの研究成果に立ち、研究主題を「主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもが育つ国語科授業の創造」として視点を明確化し、研究を進めていきたい。

本研究主題は、「主体的に学ぶ子ども」「自覚的に学ぶ子ども」が育つための「国語科授業」を創造していくことを目的としている。「主体的・自覚的」という文言を取り上げたのは、これからの変化の激しい社会を生きぬいていくためには、国語科においても、「知識や技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」の育成をめざしているからである。

自分が何のために学んでいるか（きたか）、どのようにことばの力を付けているか（きたか）など

○現代の社会を生きていく子どもに求められる姿。

○平成12年度、「第27回徳島県小学校国語教育研究大会（小松島大会）」以降の研究の経緯。

○これまでの成果。

- ・学習者理解
- ・国語能力（表）
- ・年間指導計画
- ・国語科授業の充実
- ・評価の具現化
- ・目標設定・指導・評価の一体化

○「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」を求める理由。

- ・国語科における「生きる力」をめざして

○「主体的・自覚的にこと

が分かるというように、「自覚的に学ぶ」力を身に付けた子どもは、自己のことばの学びや生活を見つめるとともに、満足感や自己肯定感を得ることができるようになる。また、一人一人が自己の国語科学習の成果と課題を明確にして、自らの課題を解決しようと「主体的に学ぶ」力を発揮しつつ、次の国語科学習へと取り組んでいくようになる。このように、子ども一人一人は、他とかかわりつつ、ことばのよさやおもしろさ、すばらしさや美しさなどに気付き、分かり、表現するなどして課題を解決していくようになるのである。子どもは、ことばを学ぶ自覚が芽生えることにより、いっそう主体的に学ぶようになり、主体的に学ぶことによりいっそう自覚が深まっていく。つまり、「自覚的に学ぶ」ことと「主体的に学ぶ」こととは、螺旋的な関係にあるととらえられる。

ここでは、本気になって言語活動に打ち込む単元・授業を展開していくこと、換言すれば、これまで実践されてきた、「単元学習の理念」が生かされた国語科授業が大切になってくる。

以上のことから「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」として、たとえば、次のような姿が考えられる。

- ① ことばへの興味・関心をもち、そのよさなどに気付いたり、理解したりする子ども
- ② 進んで自己のことばの生活を見つめ、そのなかから、学ぶべき価値ある課題を発見する力、また、ことばの生活・文化についての課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ③ 「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を、確かに、豊かに展開し、情報の収集、選択などを行いつつ、課題を解決したり、自己の考えをつくり出したりすることができる子ども
- ④ 「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を、他（他者や学習材）とかかわりながら展開し、自己の考えを伝え合いながら、よりよい考えをつくり出していくことができる子ども
- ⑤ 一連の学習をとおして、ことばの学びの過程や成果を確認することができ、満足感や自己肯定感を得て、新たな学びへの意欲へと変えていく子どもや、振り返る習慣をもつなど評価への目を有する子ども

### 3 研究副主題設定の理由とその考え方

#### (1) 「読むこと」を取り上げた理由

「平成17年度徳島県における児童生徒の基礎学力調査」によると、本県の子どもの国語力の実態として、「書くこと」の力や「文法」の力とともに、「読むこと」の力を付けることが課題の一つに挙げられている。また、2004年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」には、「国語科教育の在り方」で「<指導の重点は「読む・書く」にある>」とし、『小学校段階では、「聞く」「話す」「読む」「書く」のうち、「読む」「書く」が確実に身に付くようにしていくことが大切である。』と述べられ、文部科学省の「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査の課題と今後の対応」の一つには、「様々な文章や資料に基づいて、自分の考えをまとめたり評価したりする言語活動の充実」が挙げられている。さらには、2003年7月に実施された経済協力開発機構の「生徒の学力到達度調査」の調査結果を受けて、「書くこと（話すこと）」につながる「読解力」（いわゆる「PISA型読解力」）の向上が求められている。このような背景には、「特に、文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることが重視されている」学習指導要領国語のねらいとするところが徹底されていないという指摘がある。「読むこと（読んだこと）」と「話すこと」「書くこと」とを、「考えること」で結んで指導することが十分ではなかったのではないかと考えられるということである。

以上のように、本県の子どもの国語力の実態と社会の要請から、子どもに身に付けさせるべき国語力の基底の一つに「読むこと」があるととらえ、本研究では、「単元学習の理念」が生かされた国語

ばを学ぶ子ども」はどのようなようになっていくか。

（「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」を育てると、こんなことがよい。）

○「単元学習の理念」を生かす。

○「単元学習の理念」とは「子どもの興味・関心・必要に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動をとおして行われる学習という考え方」のこと。

○めざす子ども像の「例」  
・興味・関心をもち、育てることから、自己評価へとつながるが、「螺旋的」に

○子どもの実態と社会の要請から「読むこと」を取り上げる。

- ・本県の子どもの国語力の実態
- ・文化庁文化審議会答申
- ・文部科学省の調査結果
- ・経済協力開発機構の調査結果

○「単元学習の理念」を生かすのは、単元学習では「話す・聞く」「書く」「読む」力を総合的に身に付けさせることができるからであ

科学習を展開していく過程で、「読むこと」を見据えていきたいと考えた。

## (2) 「読むこと」を見据えたとは

「読むこと」を見据えるとは、組織する言語活動や国語力を「読むこと」のみに絞ることではない。子どもが生涯にわたって生きていくためのことばの力を考えたとき、「読むこと」を見据えるとは、多様な読む活動を言語活動や国語力の基底に据えて、「話す・聞くこと」「書くこと」「言語事項」と単元内・単元間等で常に関連を図り、子ども一人一人に豊かな読む力を育てていくことである。

その際には、たとえば次のような言語活動「例」が考えられる。

- ① 文章を目的や意図に応じて、楽しんで、進んで読むこと
- ② 自己の課題を解決するために、目的をもって読むこと
- ③ 叙述に即して、確かに、豊かに、想像したり正しく読んだりすること
- ④ 自己の考えや他の情報と比較したり、検討したりしながら読むこと
- ⑤ 読んだことに対して、自己の考えや感想、意見をもつこと
- ⑥ 読んだことについて、その要旨や筆者の考えなどを書いたり、話し合ったりすること
- ⑦ 読んだことを活用して、自己の考えや意見を書いたり、話し合ったりすること
- ⑧ 読んだことや読む活動を日常の生活に生かすこと
- ⑨ 読んだことを自らの読書生活に生かし、読書の世界を広げること

いずれにしても、「読むこと」が終着ではなく、「読むこと」が基底となることを、念頭に置きたい。

る。

○特に「見据える」ということについての概念規定。

○言語活動「例」

ここに挙げたことは、あくまでも「例」であり、多様な言語活動が求められる。したがって、この「例」にとらわれることなく、各学校や学級の子どもの実態に応じて自在に言語活動を組織していきたい。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 主体的・自覚的にことばを学ぶ力を育てるために、次のことを意図的・計画的に行う。

- ① 他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

主体的・自覚的に学ぶ力を付けるためには、まず、他とかかわり合う力は欠かせない。他（他者や学習材など）と出会い、ふれあい、深くかかわりあうことによって、自己の課題を発見したり、他のよさを理解し取り入れたりすることができる。また、他者の学習と重ね合わせることによって、自己の学習の実態をとらえ直すことや、自己の学習の様子を振り返るための多様な視点を得ることもできる。他とかかわり合うための、伝え合い通じ合う力が育つよう指導を行いたい。

- ② 自己の学習の成果や課題、自己の成長など、自己の学びの姿をとらえる力を育てる。

主体的・自覚的に学ぶ力を付けるために、次には、学習に対する自己の取り組み方や考えたことなどを振り返り、記録として残していく活動が大事になる。「学習の記録」をまとめることをとおして、満足感や自己肯定感を得るとともに、学んだことの成果や次への課題をとらえる力も育ってくる。必要なことを記録として書き記したり、継続して記録を書き重ねたりする力、学んできたことをまとめて書く力等が育つよう、指導していくことが求められる。

- ③ ことばの力を明確にした国語能力表を作成し、年間指導・評価計画を立案する。

国語科の授業の目標は、子ども一人一人にことばの力を付けていくことにある。まず、6年間を見通して、それぞれの単元展開の過程で、どのようなことばの力を身に付けさせるかを明確にしておくとともに、基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえることから始める。そのために、学校や学級などの実態を踏まえて、国語能力表を作成し、それに基づいた年間指導・評価計画を立案したい。

- ④ 子ども一人一人のことばの生活に根ざした単元や授業を構想・展開する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには、一人一人の子どものことばの生活を見つめ、その関心・必要感を把握することも欠かせない。子ども一人一人のことばの生活に根ざした「課題」を設定することに心を配るとともに、個に応じたさまざまな学習が成立するような「場」を設け、

○研究主題解明のために。

○「主体的・自覚的に学ぶ子どもを育てる」ために。  
・他（他者や学習材）とかかわるといふ観点から

・自己評価力を育てるといふ観点から

○「主体的・自覚的に学ぶ子どもを育てる」ための基盤として。

・年間指導・評価計画の立案という観点から

・子どもの側に立った授業を構想・展開していくという観点から

目的に応じて学習材を編成していく。そして、必然性をもって学ぶ過程で、生きて働く力として身に付けることができるように、「学習の手引き」などによって、指導していきたい。

(2) 「読むこと」を見据えた国語科授業の充実を図るために、次のことを意図的・計画的に行う。

① 「読むこと」と「話す・聞くこと」「書くこと」「言語事項」との能力の関連を図る。

年間指導・評価計画の立案、単元・授業の構想をする際には、「読むこと」と「話す・聞くこと」「書くこと」「言語事項」のそれぞれの能力がどのように関連するか、どのように関連させれば子ども一人一人に生きて働く力となっていくか、その見極めと関連のさせ方が重要である。

② 「読むこと」を生かす単元を構想し、展開する。

前述の「言語活動例」をもとにして、子ども一人一人が「読むこと」が楽しい、生きたという実感や満足感を得られるような単元を構想・展開したい。そのためにも、子ども一人一人の「読む」目的（子どもにとっての「活動目標」）を明確にした、多様な言語活動を組織していきたい。

③ 「学習の手引き」や「学習の記録」の活用をするなど、「読むこと」の指導の充実を図る。

「読むこと」を見据えた言語活動を組織し、国語力を育てていくためには、「学習の手引き」や「学習の記録」が欠かせない。子ども一人一人の学習の成果や課題を「学習の記録」から把握し、子どもの実態に応じた「学習の手引き」を活用することによって、「読むこと」を見据えた学習指導を充実させていく。

④ 「読むこと」を見据えて、目標設定・指導・評価の一体化を図る。

年間をとおして子どもの姿をとらえ、国語能力表等との関連から、適切に単元や授業の目標を設定したい。学んだ結果だけでなく、学ぶ過程を重視して評価し、設定した目標を達成できるように指導しなければならない。その際に、指導者は、子ども一人一人の内面に「読むこと」が、どう位置付けられているか、読書生活や言語生活にどう生きているかにも目を向けることが肝要である。

(3) 「読むこと」を豊かにするために次のことに配慮する。

① 「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図り、年間指導・評価計画を作成する。

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより、「読むこと」の活動や力が生活に根ざし豊かに生きる場が、必然性をもって生じてくる。このように必然性をもった言語活動の場が年間、さらには6年間を見通して計画されることにより、国語科で身に付けた力が他教科等で生かされながら、繰り返し学んでいくことができる。互いのねらいを生かし合うことや多様な連携の姿を探ることに留意して、年間指導・評価計画を作成したい。

② 図書館の効果的な利用を図る。

情報センターとしての図書館の価値のうえに、読むことの楽しさを味わう場としての図書館の存在は、子どもの心を豊かに育てるうえでも大事になってくる。朝の読書や読み聞かせなど、読書の取り組みとともに、学校や地域の図書館の利用を子どものことばの生活に位置付けたい。

③ 『作文読本』の効果的な活用を図る。

『作文読本』は、徳島県の子どもの書く力を育てるための月刊誌である。しかし、書く技能そのものの育成だけでなく、読んだことをまとめて書いたり、読んだことに対する考えを書いたりするなど、「読むこと」と「書くこと」とを関連付けて子どもの生活に根付かせるためにも、その活用を図りたい。また、子ども同士が作文を通じて交流することにより、書く力、読む力を育成したい。

④ 学級や学校の言語環境づくりに心がける。

音声言語環境としての指導者の話しことばや読み聞かせ、文字言語環境としての背面黒板や掲示板、新聞、さまざまな読み物などの活用を図る。特に「読むこと」においては、学級文庫の活用や充実が欠かせない。

○研究副主題解明のために。

○「読むこと」を見据えた授業の充実のために。

・能力の関連を図るという観点から

・単元の構想・展開という観点から

・実際の授業における指導の充実という観点から

・目標設定・指導・評価の一体化という観点から

○「読むこと」を見据えた国語科授業を豊かにしていくために。

○「読むこと」を見据える際には「図書館の活用」が特に重要である。学習指導要領国語においても、「学習・情報センター」「読書センター」として「図書館が有効に機能すること」が求められている。

○『作文読本』は、今求められている「読解力」の育成にも、欠くことのできないものである。